

地域に広がる「コラボレーション」

「見、福祉とはかけ離れたイメージの分野でのコラボレーションが各地で進められています。今回は、園芸と芸術を通して取り組みをご紹介し、コラボレーションが生み出す効果について考えます。

1 園芸とのコラボレーション



「福音の園・川越」のガーデンにて。ホーム長の杉澤卓巳さん(左)と「土と風の舎」代表理事の渋谷雅史さん。

▼草花の持つ癒し効果

新緑が目まぶしく初夏の花が街角のあちこちで咲き出すこの季節。その風景は時に人の心を癒してくれるものです。園芸療法ではこの草花の癒し効果に着目し、植物の世話を通して自然と触れ合うことによる心身機能の回復・維持を目指し、さらには日の光や風を体に感じることで五感を刺激し、長いホーム生活で失いがちな見当識(※1)を補うことを目的としています。



皆さんで協力し合って丁寧に植えつけていきます。

▼笑顔を支える「コラボレーション」

この日のテーマは「夏野菜の植え付け」。渋谷さんはゴーヤ、ピーマン、トマトなどの苗を参加者に見せながら「これは何の苗でしょう」「どう説明し、そこから参加者間に「収穫はいつ頃かね」「どんな料理にしようか」「昔は家の庭でも作っていたなあ」とど会話が続いていきます。

畑はあらかじめ耕され、苗の入ったポットと肥料が均等に置かれています。植え付け作業が開始されると、自ら進んで畑に入っていく方、畑の周りをスタッフと手をつなぎながら散歩する方、庭に咲くバラを摘んでもついでに「顔の方、枝から落ちたくらんぼを手のひらに乗せて眺めている方…。通り方は様々ですが、皆さんの笑顔が印象的です。



花壇に腰掛けて歌を歌っています。



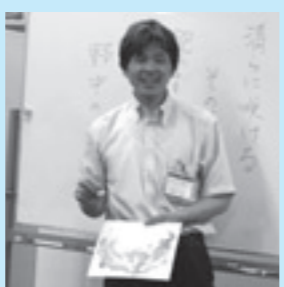
車椅子でも畑に入れるように工夫されています。

園芸療法の環境を整えることは容易ではありません。日々の草むしりや水やりを始め畑の管理は大変な仕事ですが、杉澤さんの強い使命感と、業務提携でバックアップする「土と風の舎」のスタッフ、ボランティアの存在がこの活動を支えています。

※1 見当識…現在の年月や時刻、自分がどこにいるかなど基本的な状況を把握する能力

▼アートセラピーがもたらすもの

「認知症であっても感性で表現ができます」との「おのの」感覚が本人の自信を回復させます。また、配偶者など家族も同じ画題で絵を描くことで共感が生まれ、それまでの日常生活のイライラや不安を原因として悪化していた関係が徐々によくなっていくのです」と鍋島さん。



参加者の感性を上手に引き出す鍋島さん

今回の事業を主催する埼玉県立大学でアートセラピーを研究している保健医療福祉学部教授の野川とも江さんは、「認知症の初期の段階であれば、アートセラピーによりコミュニケーション力や社交性を維持することが期待できるのです」と語ってくれました。

※2 若年認知症：65歳未満の認知症
※3 臨床美術士：NPO法人日本臨床美術協会認定の資格

3 コラボレーションの創造

景気の停滞や深刻な少子高齢化は、山積する福祉課題の解決を一層困難にしています。そんな時代だからこそ、異分野との協働「コラボレーション」を、解決の一つに至る突破口として活用してはいかがでしょうか。

皆さんの地域でも、身近なコラボレーションから始めてみませんか？

問い合わせ先

土と風の舎 ☎049(248)9485
埼玉県立大学 地域産学連携センター ☎048(973)4114

2 芸術とのコラボレーション

NPO法人「福音の園・埼玉」のグループホーム「福音の園・川越」では「癒しの園芸療法を基本方針の一つに掲げ、「人と自然と地域をつなぐ」を合言葉に活動しているNPO法人「土と風の舎」と協働して月2回の園芸療法に取り組んでいます。

埼玉県立大学と株式会社芸術造形研究所は、協働して若年認知症(※2)の方とその家族を対象としたアートセラピーを行っています。

▼感性を引き出す

参加者にカリフラワーを手渡しながら、臨床美術士(※3)の鍋島次雄さんは話し出します。

「ああ、触ってみましょう。カリフラワーにはどんな食べ方がありますか。今度は裏返してみましよう。茎の部分が力強いですねー」



埼玉県立大学の図工室にて。鍋島さん(ホワイトボード前)の軽妙な語り口が参加者の緊張を解きほぐします。



絵の具を含ませたスポンジで葉を描き、割り箸と鉛筆で茎を描きます。手を汚しながらの作業は懐かしさも新鮮な感覚!